
ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（美少女）

イルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（美少女）

【Zコード】

Z9258Y

【作者名】

イルカ

【あらすじ】

俺はダンジョンを探索する探索家だ。夢はそうだな、もちろん男ならハーレム！それもだ、名声と実績で美女が寄ってくるハーレムだ、わかるか？

しかし問題が色々あるわけ。そう、質の悪いストーカー（美少女）に付きまとわれてるとか、ファミリーの神様が超美男子で女をみんな持つていつちゃうとか、な。

でもさ、未だ謎とされてるダンジョンの謎を解けば、絶対ハーレム完成だよな。

だから俺は今日もスマーリーの仲間とダンジョンに潜る。

プロローグ

「前方にオーラークチーフが2体POP、右からはビッグブラッドバットが4体。ヤバイ、ヤバイよ囮まれる。」

サポートに徹してたチールが叫ぶ。

しかし前衛の俺とカルシュは今日の前のミノタウロスを相手にするので精一杯だ。

「マーリッシュュ、ベルサリア、魔法で迎撃。バックスは足止め、頼むぞ。」

俺はみんなに指示を出すが既に連続戦闘時間は1時間近い。そもそもみな、特に女性陣は体力の限界が近づいているだろう。

そろそろ退却を考えるべき時に来てるのかも、と思うが、まだそこまで追い詰められている訳でもなく中々決断できない。

「ダアアアアア

その時、危機に瀕すれば瀕するほど燃え上がるという難儀なスキル持ちのカルシュは一気に気合が入ったのか猛然とミノタウルスに切りかかる。たぶんスキル発動したな。

そのお蔭で長身カルシュの身長もある大剣が、ミノタウルスの堅い筋肉をやすやす切り裂き、右肩付近から右腕を切り飛ばすことに成功した。

ミノタウルスが絶叫と共に仰け反る。チャンス

「我まいしは魔を切り裂く光の雷。剣に宿りて全てを切り裂きし刃となれ」

雷を剣にまとわりつかせながら動きの止まつたミノタウルスに突進する。

俺の唯一使える魔法、それがこの雷エンチャントだ。

自分の剣にしか使えない、詠唱が長い、持続時間が短い、燃費が悪いと四拍子揃つて使いにくいんだが、威力は絶大。

「うおおお

気合一閃、失われた右腕の箇所から一気に胴体を輪切りにする。

ちなみに今の俺ではエンチャントかかつてない状態だと、精々剣が食い込む程度の威力しか出せない。

「カルシュ、オークチーフとビッグブラッドバットに苦戦しているマーリッシュュ達の援護に向かうぞ」

「待つてマズイ、後ろでミノタウルスが2体POP中だよ。何とかしないと退路を断たれる！」

再びチールが叫ぶが、その叫びには先ほどよりはるかに危機感がこもっている。

危機がピークに達している現状で、チールはすでにミノタウルスへ向けて走り出している。たいして俺はエンチャントの効果時間すでに終了しており、剣にまとわりついていた雷は消滅。攻撃力は激減中だ。

いくらチールでも単独でミノタウルスを倒しきることは難しい。撤退を成功させることだけを考えねば全滅の危険性もある。

「つく、ミノタウルスは俺が足止めする。チールは魔石とドロップアイテムの回収、それが済みベルサイヤはかく乱魔法、同時に全員退却。14層への階段まで走れ。」

俺は素早く指示をだし、身をひるがえす。

「グオラウウウウ

直後、ミノタウルスのそれより遥かに大きな雄叫びと共に、ミノタ

ウルスの胸の急所、魔石の部分から巨大な手が生えた。2匹のミノタウルスはあっけなく消滅。

その手が握ったミノタウルスの魔石はすぐさま巨大な口へ運ばれ消えた。

「ら、ラノタウルスだと……」のタイミングで。

カールが隣で呟く。15層のフロアボスたるラノタウルス。サイのような顔と三本角を持つ巨大な人型モンスター。そう俺たちがこの場所で1時間も狩りを続けていたのは、こいつを待っていたからだ。しかし、これはタイミングが最悪。みな疲弊しておりオークチーフなど、雑魚とは呼べないレベルのモンスターを相手にした状態。ミノタウルスを一撃でぶち抜くこの怪物と戦えるだけの余力は到底持つてない。

不味い、ホントマズイ。これは、ヤバイって。

「全員即座に退却。走れ。」

もうアイテムとか魔石とかそんなものはどうでもいい。このままじやアレが来る。そしてまた取り返しが……

「はい。オイタはいけませんよー。私”を”愛する人に近づくなんて最低ですねー。」

場違いな甘い猫なで声。

と、同時にラノタウルスの体を幾筋もの銀光が通り抜ける。

「グオ？」

間抜けな声。そしてフロアボスたるラノタウルスは振り返る事もなく、あっけなく解体された。

「はい。私”を”愛するマイダーリン。無事？」

その女は軽やかにステップを踏みながら、俺たちが散々苦戦していたモンスターを一瞬で解体していく。

流石は現在、最強の一角とみなされる女剣士だ。この華奢に見える体にどれほどの力を内包しているのだろうか。

しかし、

「やつぱりもう来たのかよ・・・まあ助かった・・・けどよ」
俺の疲れたため息が15層のフロアに染み込んでいった。

プロローグ（後書き）

初投稿作品です。見づらご所も多々出でてくると思いますが、都度修正したいと思いますのでよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9258y/>

ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（美少女）

2011年11月27日19時49分発行